

スイス史をいかに教えるか — 「ヨーロッパ史」の実例として —

齋 藤 泰

Wie hält man eine Vorlesung über die Schweizergeschichte ?

— Ein Beispiel von der Vorlesung über die „Europäischen Geschichte“ —

1. はじめに

我国で明らかにマイナーであるスイス史を、教養基礎教育（旧、一般教育）の授業として教えるようになってから、もう20数年になる。振り返るに、大学の教壇に立ってから数年後に、はじめてスイスの歴史を授業に取り上げた。それは、無謀というもので、その頃和書で参考に来たのは、わずか2冊だけであった。しかし、丁度この頃から、私は、スイス連邦の成立史に研究対象をシフトしていたので、専らドイツ語の文献を頼りに授業を進め、年を追って、内容を深めていった。これまでのノートを手にとって見ると、文字通り隔靴搔痒ではあるが、それでも、回を重ねるにつれて、授業の狙いもより明確になり、また進め方にもいろいろ工夫を凝らすようになってきているのが分かる。

授業目標を絞り込み、スイス史を通して、何を教えるようとしているか、明確な論点を定めるように努めた。また、技術的なことだが、毎年、学生に編別構成を整えたノートを作製させ、手作りのノートを通して、一層理解し易くした。さらに、学生の興味と関心を深める有効な手段として、地図、図説、絵もフルに活用した。地図にはカラフルに着色させ、目で地図から歴史を読み解くやり方を自ら経験させるように心がけた。そして、地形と風土を知って、はじめてその国の歴史と文化が把握出来るので、絵やビデオを活用した。かつては絵はがきや観光案内図を併用したが、今では、私が自ら撮影したスライドやビデオを使って、現地探訪の話を変えながら、文字通りヴィジュアルに理解出来るよう工夫を凝らして来た。

そうした努力の甲斐があったのか、1998年度「ヨーロッパ史」の授業アンケートでは、「この授業はよく準備されていた」(A)と、「この授業は教員の熱意が感じられた」(B)の問いに、回答者全員(27名)が「そう思う」と回答し、ともに何と100%の評価を受けた。翌99年度、41名のうち、(A)は85.37%、(B)は92.68%とやや減少したが、2000年度の回答者45名では、(A)が88.89%だが、(B)は再び100%となり、幸い、いずれも好評であった。これには、正直なところ、驚きとともに、喜びも隠し切れなかった。

昨今の激しい大学改革の中で、いかに学生が興味を抱く授業をするか、それ自体が重要な課題になっている。また、授業評価から授業公開まで、教養教育も様々な企画が試みられている。そうした試みとして、これまでの「ヨーロッパ史」の授業に、このような評価が下されたことは、今後の授業改善に上でも、大変勇気づけられる。まだまだ改善の余地を残しているが、ここで、中間報告的な形で、「スイス史をいかに教えるか」というテーマを設定して、教養教育科目「ヨーロッパ史」のささやかな実例を紹介し、反省も込めながら、今後の課題を考えてみ

たい。

2. スイス史授業の狙い

『『スイス学のススメ』という講義題目で、ヨーロッパの小国スイスの歴史と文化について、スイスの古代から中世までの時代に限定して、多角的に論じる。近年の国家の枠を超えて、新しいヨーロッパ像を捉える一つの試みとして、多民族・多言語国家の重要性と、その形成過程を具体的に考え、ヨーロッパの中でのスイスの歴史的意義を考察する。さらに、その土地の風土、地形から、歴史を読み解く大切さを強調したい。』

これが、2001年度のシラバスに掲載した教養教育科目「ヨーロッパ史」〈目的・主題別科目〉【地域社会論】（Ⅰ期，2単位）の「授業の目標」である。

この授業の狙いは、先ず、最新のヨーロッパ像を的確に捉えさせることである。周知のように、近代の「国民国家」を問い直す問題提起が、社会人文科学の諸分野からなされてから久しい。こうした近年の学界動向を真摯に受け止めながら、同時に現実には時事刻々と進行している「ヨーロッパ連合」（EU）を直視すると、ヨーロッパの新しい潮流が直に感じられる。「近代の神話」であった、旧来のヨーロッパ「国民国家」の枠組を見事に超えて、経済統合から政治統合へ、そして、今年からは、統一通貨ユーロの流通に大胆にも踏み切ったEUの驚くべき動きを目前にすると、そもそもヨーロッパにおける「国民国家」とは何であったか、また、いかなるヨーロッパ諸国も、その基本形態は「多言語・多民族国家」ではなかったか、をじっくりと考える好機ではないだろうか。

もちろん、この場合、そもそもEUとは何か、いかなる戦後の経緯で成立・発展し、今後いかなる方向に向かうのか、を多角的に考察するのも、新しいヨーロッパ像を捉えるのに望まれよう。しかし、他方、基本的には、大小問わず、ヨーロッパ諸国は多民族・多言語からなる複合国家であるから、いずれかの国に注目し、その多民族・多言語の特性とその由来にじっくりと目を向けるのも、これまた必要ではなからうか。かつての大国であったイギリス、フランス、ドイツでもよい。北欧諸国や東欧の国々、あるいはイタリア、スペインなど地中海諸国を俎上に載せるのもよい。だから、ヨーロッパの心臓部にある、山と湖の小国スイスから、この問題にメスを入れるのも、十分可能なのである。

第2に、歴史を、地形や風土から読み解くことである。歴史学の研究には、史料・文献への史料批判的な格闘を経て、より客観的な論証を試みるのは、いうまでもない。しかし、同時に、出来事や事象の舞台となった、その地形と風土に目を据えて、そこから歴史を読み解く手法も、決して無駄ではない。いかなる時代でも、人間の生き様が歴史であるので、その人間が実際に生きていた場から考えることである。そのためには、実際にその国、その地域に足を踏み入れて、その場に身を置くことが望ましい。そうした追体験を通じて得るものは、直接言葉にはならないかもしれないが、その歴史を考えるのに貴重だ、と思う。

例えば、スイス連邦の建国の舞台となった、中スイス地方の渓谷共同体を考えてみよう。深い森と湖、その先には奥深く切り立った峡谷や紺碧の川、さらに目前には峻巖な山々と急坂の斜面に広がる高山放牧地、そして山並みをジグザグに走る街道。高山放牧地というと、「アルプスの少女ハイジ」の舞台になった緑の絨毯の広いアルム・アルプを想起するかもしれないが、実際に中スイス地方のそこに立つと、全く想像を反して、ごつごつした岩と峻巖な谷底からなる、厳しい地形に驚かされる。こうした地形を直に目で確かめる、あるいはそうした地域特有の地形や風土を伝えることによって、はじめてそこに生き抜いた人々の気質や心性が少しはイメージできるのではないか。まさに「土地が語りかけるもの」の視点の大切さである。「その

土地に行くと、足の裏から、その土地の記憶が伝わってくる」、あるいは「実際にその土地へ行って、立って、空気を吸うと、本当に足の裏から土地の記憶が語りかけくる」、といった境地である。

こうした地形や風土を念頭におきながら、その時代を考え、歴史的な出来事や事象を捉えるのは、プラスこそなれ、マイナスにはならない。それどころか、数少ない文書史料を読み解くにも、少なからず役立つ。文書に出てくる組織や人物、あるいはその文書公布の背景が、ある程度表象（イメージ）することができるからである。そうすれば、どんなことがあっても、文書を読み違えすることなく、たとえほんの少しでも理解を促すのに役立つのは、先ず間違いのないであろう。

地形と風土を重視するのは、もう一つ、その土地に伝わる伝説や神話を取り上げる際、予想外の効果を発揮することである。伝説や神話は、当時の人々あるいは後世の人々がイメージしたものである。例えば、ヴィルヘルム・テル伝説をはじめとするスイス建国伝説が広く世に言い伝えられたのは、15世紀中頃である。それは丁度、ドイツ、フランスに対して、「スイス人」意識が次第に覚醒し始めた頃である。だから、建国伝説には、15世紀に生きていた人々が思い浮かべていた時代のイメージが色濃く表出されている。と同時に、彼らが思い浮かべていたスイス建国史を遡り、彼らがイメージしていた建国の経緯を、建国伝説から推測することも可能となる。とすると、2、3世紀の間隔があるとはいえ、同じ中スイス地方の溪谷に住んでいた人々および彼らを取り巻く時代環境も、建国伝説から読み取れるだろうし、否それどころか、逆に、建国の頃に人々が生きていた中スイス地方の地形と風土を知らないことには、建国伝説を読み取ることは、先ず不可能ではないだろうか。

そして、また、こうした建国伝説を虚構として一蹴するのではなく、決定的に史料が不足している時代にあっては、文書史料を補う貴重な資料としても、十分に活用できるものである。今日にまで伝えられている建国伝説が描く出来事は、そう簡単に排斥できるものではない。むしろ、そういう時代だからこそ、建国伝説と文書史料との摺り合わせが一層望まれる。そういう意味でも、地形と風土から歴史を読み取ることが、改めて重視されるのではないだろうか。

3. スイス史授業の概要

「スイス学のススメ」(Einleitung in die Helvetica; Introduction à l'Helvetica; Introduzión della Elvetica) という講義題目で、以下の内容構成で授業を進める。

①スイス史とスイス学

森と湖そしてアルプスの小国スイスの国名は、「スイス連邦」であり、スイスの国語・公用語の63.7%を占め、その建国の舞台である中スイス地方でも使われるドイツ語で表すと、„Schweizerische Eidgenossenschaft“ が正式国名である。それは、中央スイスの四森林州湖を取り囲む3つの溪谷、ウーリ、シュヴィーツとニートヴァルデンの代表者の間で盟約された「原スイス永久同盟」に由来する。1291年8月1日のことであり、この日がスイスの建国記念日となっている。この永久同盟が軸になって、周辺の都市が加わり、14世紀中頃から、「八州同盟」に発展した。そして、1513年以降18世紀末まで、内外とも「十三州同盟」がスイスを代表した。それが近代国家としてのスイス連邦に生まれ変わったのは、1848年であり、ベルンを首都として、23州からなる連邦国家として、今日に至っている。

スイス史は、大きく3つに区分できる。1291年以前の連邦創設以前の時代、それから1798年までの古い連邦の時代、そして、1848年以降、連邦憲法に基づく近代国家としてのスイス連邦の時代である。これは、ヨーロッパ史の時代区分に沿って、古代から中世前期のスイス、中世

後期から近世末までのスイス、そして近代スイス史となるが、このスイス史、とりわけ古いスイスには、「ヘルヴェティカ」(Helvetica)という言葉が一般に使われる。これは、古代ローマ時代のスイスの呼称「ヘルヴェティア」から由来し、その形容詞である。スイスでは、歴史のみならず、「古いスイス」、「古くスイス的なもの」に、「ヘルヴェティカ」が当てているようで、このタームは、歴史、文化、民俗、宗教、地理から風土、習慣までを総称している。強い日本語に置き換えると、「スイス学」の語にあたる。古いスイスを考えるには、文字通り学際的、多角的アプローチが求められる訳で、そういう意味でも「ヘルヴェティカ」の呼称は言い得て妙であろう。

以下に記すように、主にスイス連邦の成立までのスイス史を中心とするが、常に民族、言語、宗教そして地理や風土についても、そのトピックを取り上げながら論ずるので、講義題目に「スイス学のススメ」とした。と同時に、あまり知られていない、古いスイス事情を紹介し、スイスの独自性を少しでも引き出せたら、ということで、この題目を選んだ所以である。

②ヘルヴェティアとラエティア—先史時代のスイス

古代ローマ以前のスイスでは、湖上家屋集落の時代と、ケルト時代に焦点を絞る。中部ヨーロッパには、紀元前1000年前後、湖畔や川畔に木造の湖上家屋が造られた。今日でも、ボードン湖やチューリヒ湖には、その集落跡がいくつか保存され、再現されている。ドイツに属するが、ボードン湖畔のウンターウールディンゲン湖上家屋跡は、一見に値する。

およそ紀元前5世紀中頃から、ヨーロッパ諸国において、鉄器文化を代表するケルト民族が移動を開始したが、その鉄器文化の後期は、「ラ・テーヌ文化」の名で知られている。だが、この呼称がスイスの湖畔の遺跡名から由来するのは、あまり知られていない。現在、西スイスのヌシャテル湖からビール湖に流れる運河の入り口の左岸に、夏期の観光船の船着き場、ラ・テーヌがあり、ここから広がる湿地帯で、鎌、鋤、槍や刀あるいは金細工の装身具が発見された。その優れた鉄器文化から、ラ・テーヌ文化と呼ばれ、世界史の先史時代の重要な文化となったのである。

ケルト民族のスイスへの移動定住が、今日まで、スイスの文化と歴史の基底を特徴づけているのも忘れてはならない。まず、この民族のヘルヴェチー人が定住したのが、スイス中央部全域から西半分までで、ここから、古代ローマ時代、今日のスイスに住んでいた人々を「ヘルヴェチー人」と総称し、彼らの定住領域を「ヘルヴェチア」と呼ぶようになった。そして、いつの間にか、スイスを総称する言葉となった。先ほどの「ヘルヴェティカ」(スイス学)と同じ語源である。現在、スイス共通の正式国名(ラテン語)‘Confoederatio Helvetica’、切手にある国名‘Helvetia’も、同じである。

ローマ時代はそう呼ばれたらしいが、正確には、スイス東部には、別のケルト民族、ラエチー人が移動、定住していた。ローマ時代、「ラエチア」と呼ばれ、言語も民衆ラテン語であるロマンス語を受容したが、本来のケルト語と混合して、レート・ロマンス語として存続した。スイス東南部、グラウビュンデン州の山岳地方に分散し、今日の第4の国語・公用語になっている、この言語は、ヨーロッパでも数少ないケルト系の言語として、生き残っているものである。

③ヘルヴェチア—ローマ時代のスイス

かの有名なユリウス・カエサルのガリア遠征は、スイスに定住していたヘルヴェチー人に対する攻撃から始まるのも、あまり知られていない。カエサルの『ガリア戦記』を繙くと、その第1巻(紀元前58年)は、ヘルヴェチー人との戦争から始まる。ヘルヴェチー人は、スイスの村を完全に焼き払って、南西に新天地を求めて移動を開始した。ジュネーヴから西北、

ロワール河の最上流に向けて進んでいた彼らに対して、カエサルは追撃する。紀元前58年、ピブラクテの戦いで、後にはブリタニアにまで遠征することになるカエサルの最初の輝かしい勝利である。敗北したヘルヴェティ人はスイスへの帰還を余儀なくされ、以後、ローマの属州に組み込まれた。ここにスイスのローマ支配のはじまりとなる。この経緯が冒頭を飾っている『ガリア戦記』を片手に、ジュネーヴからリヨンを経て、ローヌ河の支流ソーヌ川を上り、フランス・オー・マルヌ県のオートン近郊の戦場跡へのコースを辿るのも興味深い。

紀元前15年には、スイス東部のラエティ人もローマの支配下に陥り、これから400年近く、スイス全土がローマ帝国に属した。そして、地理的にみて、スイスが、その峠を越えて、属州や北方のゲルマン人に対する軍事的要衝の地になったのは、当然であろう。すでに人の往来があったという、グラン・サン・ベルナル峠（2469メートル）が開通したのは、西暦47年らしい。イタリアの国境の町アオスタから、峠を越えて西スイス、ローヌ河畔の町マルティニーに通ずる。現在、この間、ローカル電車とバスを乗り継いで、峠に行ける。この重要な峠を越えて、ローマ街道がスイス西北部を南北に走っていた。その街道沿いに都市が点在したが、中でも軍団本拠地ヴィンディッシュと政治の中心地アヴァンシュのローマ都市は繁栄した。古代ローマの遺跡が崩れたまま保存されているもので、アヴァンシュは十分に見るに値する。中世以降の都市になっても、その中心に現存している円形闘技場も見事だが、周辺のあちこちにローマ東門やローマ劇場が崩れかかったまま残っている景観は、それだけで十分古代の繁栄を彷彿させる。しかも、そのローマの廃墟を背に黙々と農作業している人々を見ていると、一瞬のうちに2000年の遠い隔たりを忘れ去らせるであろう。

スイス最大の都市チューリヒの中心街、リマート川畔にリンデンホーフという公園があるが、この丘にはローマ時代の砦が築かれていた、という。また、東スイスからイタリアに通ずる峠の街道沿いに、アルプスを背にライン河畔都市クールもローマ都市として知られている。中世には、司教都市として繁栄し、その司教座教会は、ロマネスク様式の教会で、多くの人々を引きつけて来た。そこから北に向きを変えるライン河を数キロ下ると、右岸にマイエンフェルトというローマ小都市がある。ここは、アルプスの少女ハイジの舞台として有名である。これまた我が国ではあまり知られていない。

④「4つの国語」のはじまりー中世初期のスイス

西暦375年、ゲルマン民族大移動が始まるが、スイスでのローマ支配の終焉は、401年である。この時代、スイスにとって最も重要なのは、スイスの多言語文化の起源である。今日の最新のデータによると、スイスの言語分布は、次の通りである。ドイツ語63.7%、フランス語19.2%、イタリア語7.6%、そしてレート・ロマンス語0.6%。圧倒的にドイツ語を話す人々が多いが、その数に関係なく、いずれもスイスの国語となっている。しかも、第4の国語であるレート・ロマンス語が、2000年1月からは、公用語としても連邦憲法にはっきりと謳われた。

連邦憲法は、スイスの言語について、第4条と第70条で、

「国語は、ドイツ語、フランス語、イタリア語そしてレート・ロマンス語である。」

「連邦の公用語は、ドイツ語、フランス語、イタリア語である。レート・ロマンス語を話す人との関係においては、レート・ロマンス語もまた、連邦の公用語である。」

4つの国語・公用語のはじまりは、次のような経緯からである。スイスに最初に定住したゲルマン民族は、ブルグント族である。この部族は、バルト海から中部ドイツを経て、ジュラ山地を迂回する形で、西スイス一帯に入って来た。416年前後である。フランス東南部がブルゴーニュ地方と呼ばれるのは、彼らの定住による。彼らは、ローマ的文化を早くから受け入れ、ガリアのロマンス語を話すようになった。これがフランス語圏スイスのはじまりである。これ

に対して、5世紀末、ライン河を越えて、北ドイツから直接南下したアレマン族は、スイスの中部台地からアルプスまで押し入った。彼らは生粋のゲルマン気質を固く守り、アレマン語、すなわち高地ドイツ語をそのまま保持した。今日の6割半近くのスイス人が話しているスイス・ドイツ語は、ここから始まったのである。

もう一つ、スイスに入って来たゲルマン民族は、ランゴバルド族である。彼らは、エルベ河、オーデル川上流からドナウ河を越え、オーストリアとアルプスを経て、遙タイタリア北部に定着した。その一部がティチーノ川の渓谷に定住した。今日のアルプス以南のティチーノ州が、イタリア語圏になったのは、この部族の定住による。

このように、スイスの主要な3つの言語圏はゲルマン諸部族の定住圏に由来するが、これらの部族で最もどう猛なアレマン族によって、アルプスの奥地に追われ、ひっそりとその独自の言語文化を守り通したのが、レート・ロマンス語を話す人々である。すでに触れたように、ケルト民族のラエティー人の言葉がロマンス語と混合して出来た、この言語は、全く少数ながら、中世を経て、途絶えることなく、根強く生き残った。ヨーロッパでも数少ないケルト言語文化であるが、その独自性は、スイスでもしっかりと尊重されている。明らかにイタリア語圏ティチーノ州と並んで、グラウビュンデン州に分散しているレート・ロマンス語が念頭に書かれた、次の文章は、感銘深い。

「言語上の少数派も多数派も“少数派の保護”を口にするのを好みません。少数派の人々は“保護”されることではなく、尊重されることをこそ望んでいるのです。そして、多数派は数の上での優越性を濫用することは許されません。とくに多数派に属する人々は、四つの国語と、それぞれの国語が母体となっている四つの文化が、ともに、スイスという国の本質となっていることを、銘記しなければなりません。」(カール・ドガ『スイスの四つの国語』より)

さらに、2000年施行の先の連邦憲法の第70条第2項にも、こう謳っている。

「州はその公用語を決定する。言語共同体間の協調を維持するために、州は、言語の伝統的な地域分布に留意し、土着言語の少数派に配慮する。」

いかにスイスが言語政策に気配りし、州の言語権、とりわけ言語の「少数派」を暖かく擁護しているか、明らかであろう。しかも、十分な歴史的背景のもとに、こうした入念な言語政策が貫かれているのに、驚く。「四つの国語」は、十分な歴史的背景のもとに始まったのであって、「スイス学のススメ」では、学生の記憶に深く留めさせておきたい最重要事項の一つなのである。

⑤ フランク王国の盛衰とスイス

486年クローヴィスが建国したフランク王国は、分裂統合を繰り返しながらも、ローマ・カトリック教会と手を結んで、その権威を保持し続けた。534年、ブルグント王国を滅ぼし、王国の分国とした。一方、アルザスから西南ドイツそしてスイス中部台地一帯に勢力を伸ばしていたアレマン族は、496年と536年にフランク王国に併合された。だが、7世紀以降、部族大公領アレマンニェンとして自立化の道を辿り、10世紀以降、シュヴァーベン大公領の素地を築くことになる。

カロリンガー王家のカール(シャルルマーニュ)が、774年、北イタリアのランゴバルド王国を制圧した後、800年に「ローマ皇帝」の帝冠を受けて、スイス全体を含む「カロリンガー帝国」の繁栄をもたらした。カール大帝は、好んで王宮チューリヒを訪れた、という。リマート川右岸に高く聳えるグロスミュンスター修道院の2つの尖塔の一つに、大帝の金銀の立像が立っている。しかし、大帝の死後、西ヨーロッパと同じように、スイスも分割統合を繰り返す。

ヴェルダン条約（843年）とメールセン条約（870年）では、スイスは2分された。それから888年にブルゴーニュからプロヴァンスに建国した高ブルグント王国は、最盛期には、スイスの中部台地のほぼ真ん中、アーレ川との合流地からまっすぐ上るロイス川まで勢力を伸ばし、この川以西がほぼこの王国の支配下に入った時もある。

これに対して、962年ドイツ王国を母体に成立した神聖ローマ帝国は、1032年、この高ブルグント王国を吸収し、同君連合の形で、西スイスから東南フランスを手中にした。これで、スイス全体が神聖ローマ帝国に帰属したことになる。これ以降、ローマ教皇との力関係の中で、歴代の皇帝がイタリア経営に乗り出すや、スイスの地政的役割が次第に注目されるようになる。

⑥キリスト教とスイス

いかなるヨーロッパの国々でも、キリスト教と国家の関係はとても重要である。王国や帝国の発展も社会の発展も、キリスト教なしには語れない。

まず、フランク王権をうち立てた王クローヴィス自身、496年、アタナシウス派に改宗し、キリスト教による民衆統合を図り、王権を確立したことで知られている。実際、同年、ランスのサン・レミ教会で、司教から塗油による聖別という象徴的行為によって、クローヴィスは戴冠式を行った。彼は、「ローマ教会の庇護者」であり、自ら「神の恩寵によるフランク人の王である」という称号を手に入れた。以来、ヨーロッパの王侯は、「神の恩寵による・・・」の正式称号を帯びる。

カール大帝が、800年クリスマスに、ローマ教皇レオ3世から「ローマ人の皇帝」の帝冠を何の前触れもなく授与された、というのは、あまりにも有名な話である。さらに、919年、ザクセン大公ハインリヒは、ドイツ国王に選出され、アーヘンにおいてマインツ大司教の手で戴冠式を迎えた。同じザクセン大公にしてドイツ国王に即位したオットー1世は、962年ローマで「神の恩寵によるローマ人の皇帝」の正式に受けた。以来、歴代の皇帝・国王は、フランクフルトでドイツ国王に選出された後、アーヘンで戴冠式を迎えた。その後初めて、ローマで皇帝の戴冠をローマ教皇から直接受ける。だから、「神聖ローマ帝国」の国王のほとんどは、ローマ行きを敢行した。そこには、当然、教皇との確執や不一致も呼び起こすことも、しばしばであった。

というのは、中世の皇帝・国王がキリスト教的な戴冠式を迎えたのは、単なるセレモニーとしてではなく、キリスト教によって王権の正当化の狙いがあった。そして、彼らの重大な任務は、何よりも「この世におけるキリスト教人民のための神の代理人」であり、この欠かせない「神聖なる」使命をもって、統治にあたったのである。いいかえれば、彼らは、国家と教会の未分離の中で国家的活動をしていたことになる。だから、精力的なローマ教皇との対立・抗争が避けられなくなるのは、十分予想されることである。

そればかりではなく、キリスト教会の威力は、同時に中世社会を根底から支えていた。そのため、ここでスイスにおけるキリスト教の発展の少し概観しておこう。

スイスにおける最古のキリスト教の伝説は、西暦302年、ローマ軍団の隊長マウリティヌスが、低ヴァレー地方のアガウヌム（今日のサン・モーリス）で殉教したことである。さらに、同じヴァレー州の高ヴァレーとの境界にある州都シオンには、377年のキリスト銘の碑文が、現在同市の市役所一階に展示してあるが、これは、アルプス以北で発見された最古のキリスト教の碑文である。5、6世紀には、他の司教の名が伝わり、およそ7世紀以降、次の6つの司教座がいずれもローマ都市に設置され、それを拠点とする司教区が整っていく。ジュネーヴ、ローザンヌ、シオン、バーゼル、クールそれにコンスタンツの6司教区である。

もう一つ、スイスのキリスト教布教で見逃せないのが、アイルランド修道士の献身的な伝道

活動である。コロンバヌスとガルススの伝道士たちは、590年から614年まで、アイルランド海の北の絶海の孤島、アイオナ修道院から出発して、イギリス海峡を経由し、ブルターニュに上陸した後、中部フランスからジュラ山地を越えて、遙々ライン河に到達した。この河をさらに遡り、コンスタンツからボーデン湖を経て、イタリア方面に向きを変えた。彼らの活動で、一時アレマン族によって破壊されたキリスト教の祠が改修され、中央台地一帯からアルプスの奥地にキリスト教が浸透していた、という。

過酷な伝道活動の中で、途中から別行動を取ったガルスは、ボーデン湖畔からシュタイナッハ川を上り、614年に森の中に庵を結ぶ。そして、719年、ここにザンクト・ガレン修道院が建立された。これは、西南ドイツからスイス一帯に広大な所領を持った大修道院として発展し、有力な聖界諸侯領国の礎を築いた。また、数々の装飾写本などの貴重な文化遺産が保存され、中世キリスト教文化の宝庫になった。現在、電車か車で近づくと、この州都の真ん中に、ひととき高く聳える巨大な修道院本庁の建物に圧倒されるし、その内陣と天井画の絢爛豪華さには、言葉を失う。この背景には、修道院の「権力」と、この地域で早くから繁栄した麻織物業による産業も見逃せないだろう。修道院都市ザンクト・ガレンからは、リヨン、フランクフルトと結ぶ交易ルートが通じていた。

このように、ローマ都市を引き継いだ司教都市も修道院都市も、キリスト教の活動の拠点としての役割のみならず、中世の経済と社会の基礎も築いた。キリスト教とその教会組織が、いかに政治的、経済的、社会的な担い手になっていたか、中世ヨーロッパ史、否ヨーロッパ史全体でも必ず論及しなければならない論点なのである。

⑦皇帝、有力貴族そして都市と渓谷—13世紀スイスを取り巻く状況

シュタウフェン家の国王フリードリヒ2世は、1220年神聖ローマ皇帝の帝冠をローマで受けた。彼の使命は、旧来からのライヴァルであるローマ教皇に対抗するために、北イタリアの帝国領をいかに守るかにあった。そのために、台頭しつつある新興の有力貴族を取り込みながら、たびたびイタリア遠征を敢行した。このことから、軍事的な意味でも、スイスという地が皇帝にとって徐々に脚光を浴びるようになった。

他方、スイスでも、すでに11世紀頃から、城郭を家名とする新しい有力貴族が台頭していた。彼らは、城郭と都市を拠点に領域支配を勢力的に押し進めた。中央台地を舞台にレンツブルク家やキーブルク家が一時頭をもたげたが、後のスイスを左右したのは、かの有名なハーブスブルク家とサヴォア家である。ハーブスブルク家は、出身はアルザスだが、南シュヴェアルツヴァルトからライン河を越え、スイスに進出し、スイスでこの家柄の基盤を築く。その根城として、中部台地のアーレ川とロイス川の合流点の高台に、1020年頃、「鷹の城」(ハビヒツブルク)が築造された。ハーブスブルク家の家名はこの城郭の名前から始まる。アールガウ州のブルック市の近郊に、その居城の一部が残っている。ブドウ畑の上に立つ城郭は、予想に反して質素だ。なぜか、あまり知られておらず、訪れる人が極端に少ない。

ハーブスブルク家は、13世紀初めまでに、中央台地から中スイスの四森林州湖まで、都市を建設しながら、勢力を拡大していった。丁度同じ時期、北西イタリアから勢力を伸ばし始めたサヴォア家も、レマン湖から西スイスに進出して来た。この家柄は、ジュネーヴ、フリブールそしてベルンを支配下に入れ、中部台地でハーブスブルク家との関係は一触即発の状態にあった。いずれもスイスを舞台に一大領域国家を形成する勢いがあったからである。その上、ここに皇帝も含めると、三つ巴の抗争の様相を呈した。

ローマ時代以来の司教都市や修道院都市あるいは国王都市の並んで、こうした有力貴族が建設した都市も数多くある。山国にも拘わらず、スイスには、中世都市の発達が顕著だ。交通の

要衝地や街道、河川あるいは湖畔に都市が数多く現れた。例えば、西南ドイツの有力貴族ツェリンガー家が建設したのが、ベルン、フルブルである。

これらの都市で見逃せないのが、その経済力をバックに、政治的、社会的に大きな役割を果たしていたことである。都市は都市内の「自由と自治」を自ら擁護するのに努めた。そのために誓約によって結束を固めた。さらには、当初、有力貴族が建設したにも拘わらず、こうした建設都市も、皇帝・国王から特許状を取得し、帝国都市に昇格するのに成功する。これは、強力になった有力貴族の手から離れる有効な手段であった。同時に、内外の危機に立ち向かうために、都市同盟を結んで、一定地域内の領域平和をより積極的に進めた。特に西スイスに多く見られた。中には、周辺貴族に代わって、都市自らが周辺農村へ支配権を及ぼし、一貫した領域政策をもって、都市を中心とする「都市国家」を形成したのも、スイス都市に顕著に見られた特徴である。都市州の原型は、まさにこれである。

この都市州と並んで、アルプス山麓を背景に、いくつかの農村州があるが、その原型は、渓谷共同体に由来する。渓谷共同体の発展は、スイス建国に関わる重要なものである。丁度、スイスの中央部に、奇妙な形の四森林州湖があるが、その湖畔に、峻巖な山間から湖に流れる川の渓谷を中心に村がいくつか集まって、渓谷共同体が、おおよそ13世紀初め頃から文書に登場する。今日のウーリ州、シュヴィーツ州、ニートヴァルデン州そしてオブヴァルデン州は、そうした渓谷共同体から発展したものである。

渓谷共同体については、古くはゲルマン時代に遡る経済的なマルク共同体という学説があったが、近年では、ほぼ完全に退けられ、それに代わって、集ヶ村に及ぶ広域で、しかも実に多彩な任務を負った共同体である、とする見解で意見が一致している。渓谷は、小村、散村も含む村落間の争いの調停を担うのみならず、隣接の渓谷や外部の貴族との係争の一方の当事者の任務を帯びた。谷底の集落周辺では農耕も行われ、街道沿いには荷駄運送や宿屋を営んでいて、渓谷の産業がアルム牧畜だけからなっていた訳でない。また、雪崩、山津波あるいは洪水などの自然災害の猛威から住民の生命を守る生活上の役割も、山間にある渓谷には欠かせない任務であった。

だから、渓谷は、決して単なる地理的な概念ではなく、渓谷の人々が実際に生活していくのになくしてはならない、生活上の社会組織であった。と同時に、当時の帝国における法的・統治単位でもあった。どの渓谷も、早くから皇帝ないし有力諸侯が支配してきた地方統治単位としての任務を担ってきた。そして、都市と同じように、渓谷に与えられた皇帝特許状は、渓谷が皇帝の直接の保護下に入ったことをはっきりと裏付けている。しかも、「共同体」(ユニヴェルニタス)という法的地位が、この特許状で公認されたのも注目に値する。これ以降、渓谷共同体は、皇帝から度々直接文書を受領するように努め、しかも帝国の地方統治組織としての地位に固持するのである。

⑧スイス連邦の成立

スイス連邦の建国の舞台は、政治的、経済的に重要な都市が点在する肥沃な中部台地ではなく、上述の峻巖なアルプスの山塊を目の前にした中スイスの渓谷地方である。アルプス奥地を源流とし、乳濁色の冷たい川が谷間を縫って、四森林州湖に流れ込む渓谷地方で、それぞれの渓谷を中心に、かなり広い領域をまとまりをなして、シュヴィーツ、ウーリ、ニートヴァルデンそしてオブヴァルデンという、4つの渓谷共同体があった。これらが、それぞれ鮮やかな図柄を刻んだ独自の印璽を持ち、また軍旗と共同体の紋章を掲げながら、スイス連邦の成立と発展の中心的な担い手となったのである。

高山放牧地(アルム)と、谷底の狭い耕地に数軒の家屋敷がひっそりと寄り添い、人々が生

活を営む溪谷地方は、とても経済的に恵まれた地域とはいえない。しかも、常に厳しい自然の猛威に晒されており、それだけに勇敢で、荒々しさが溪谷の人々の気性であり、「血の輸出」というスイス傭兵の供給地となったのも、うなずける。こうした地方で、いかにスイス連邦の起源という出来事が起こったのであろうか。

それは、12世紀末から13世紀初めにかけて、この溪谷地方の真ん中を通り抜けるザンクト・ゴットハルト街道の開通である。アルプスの南に面するザンクト・ゴットハルト峠（2109メートル）それ自体は、すでにローマ時代に人々の往来があったらしいが、難所は、それより北、ウーリ州との南境の峻厳なシュレネン山峡であり、そこに橋と道を開削することは、とても人間の業では及ばず、悪魔の手を借りる他なかった、という。この伝説から「悪魔の橋」として広く知られる橋が架けられて、この街道は開通した。今日、切り立った岩盤の間をゆっくり走る赤い登山電車から、この橋を写真に収めることが出来る。

南から峠を越え、この橋を渡って、山々の狭間の街道沿いに溪谷を通り抜け、湖畔に至り、湖から都市ルツェルン経由で北に向かう。今や、この街道は、南北ヨーロッパを結ぶ最短の交易路となり、たちまち軍事的、経済的しかも政治的にも重要な役割を果たすことになる。そして、同時に、それまで帝国の辺境に過ぎなかった、この溪谷地方が、たちまち皇帝や有力貴族が大いに注目する要衝の地となった。これからはばらく、この地方を征する者が時の命運を分けた、ともいえるのは、当時のスイスを取り巻く状況からして十分考えられることである。

神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世は、イタリア経営のために、この街道沿いの戦略的役割に早くから目をつけ、溪谷地方を支配下に取り込もうとした。他方、同じ13世紀、中部台地から着々と勢力を伸ばしていたハーブスブルク家も、領域国家の形成を目指して、四森林州湖から街道筋の溪谷の奥地まで、さらにはザンクト・ゴットハルト峠までもその支配の矛先を向け始めていた。こうして、この溪谷地方をめぐるのは、皇帝とハーブスブルク家とがしばしばぶつかり合うようになった。それに対して、この事態を巧みに利用して、溪谷の人々が「漁夫の利」を得ようとしたのは、当然であろう。

まず、街道が貫通する溪谷ウーリが逸早く好機をとらえ、皇帝から直接保護を受ける皇帝特許状を正式に獲得する。それは、1231年のことである。このことは、将来のスイスの「自由と自治」への第一歩を踏み出したに等しい。1240年冬には、湖に面する北隣の溪谷シュヴィーツも、同じような特許状を手に入れるのに成功する。他の2つの溪谷、ニートヴァルデンとオブヴァルデンがいかなる地位に達していたか、については、残念ながら、確証する手ではないが、ともかく、13世紀中頃には、アルプス山麓のこれらの溪谷が、帝国都市が辿ったと同じ方向を歩み始めたのは、確かである。当時、こうした特許状を皇帝から与えて貰うことは、周辺の有貴族の支配からの解放を意味すると同時に、その後、皇帝権の名目化が進むにつれて、帝国内において一段と独立性を強めていくことを意味した。つまり、将来的には、独自の国家形成への確実な道が開けるのである。

それが現実となったのが、1291年7月、神聖ローマ国王ルードルフ1世の死後、巻き起こった不安定な状況である。王位継承争いの激化と、国王空位の長期化の恐れから、中スイス地方を取り巻く状況も再び険悪になった。ほとんどの帝国都市と同様に、溪谷内外において、いかに平和秩序を維持するか、が緊急の課題となったのである。

今や国王にもハーブスブルク家にも頼れなくなった溪谷の人々は、残された手段として、自衛手段で事態を切り抜けるしかなく、相互に同盟を盟約したのである。それは、同年8月1日のことであり、ウーリ、シュヴィーツそしてニートヴァルデンの3つの溪谷が、溪谷内外の平和秩序を独自に維持するために盟約したもので、この「永久同盟」が、スイス連邦の起源なの

である。8月1日は、その建国の日として、祝日になっている。同年12月には、もう1つの溪谷オブヴァルデンが加わった。これらの3ないし4つの溪谷は、一般に「原州」とか「原初三州」と呼ばれるのが普通で、そのことから、この永久同盟が「原スイス永久同盟」と呼称される。

伝説によると、これらの3つの溪谷の代表者が、湖を挟んで、シュヴィーツの対岸、遠くにアルプスを望む、湖畔の人里離れた小さい草地リュトリに集まって、右手の3本の指を高く挙げながら、互いに誓い合った、という。文豪シラーは、この「リュトリの誓い」をリアルに描いている。また、「リュトリの草地」は、スイス連邦の建国の地としてスイス人に広く親しまれるようになり、ベルンの連邦議事堂の議場の正面の壁画に鮮やかに描かれている。ルツェルンからの観光船が、各地で停泊しながら、リュトリの船着き場に着く。そこからジグザグの小道を登ると、草地に出る。小さい牛舎と緩やかな斜面からなる放牧地で、その草地のほぼ中央に数本の巨木があり、その脇にスイス国旗が翻っている。それ以外何もない。これがリュトリの草地なのである。

また、連邦議事堂正門の柱頭には、近代国家として生まれ変わったスイス連邦の年、1848年を左に、右には、1291年が刻まれているのを見ることが出来る。そして、わが息子の頭上のリングを見事に弓で撃ち落とす名場面を織り交ぜて、悪代官の圧制に敢然と立ち向かうヴィルヘルム・テル伝説は、シラーの戯曲などで世界中に知れわたったが、テルもまた、「自由と独立」のために闘った、スイスの建国の英雄である。彼の立派な立像が、ウーリの州都アルトドルフにあり、また、隣接する西側の溪谷の入り口、ビュルグレン村にあるテル博物館は、テル伝説の各国語翻訳を豊富に展示している。もちろん、日本の古典的名訳『ヴィルヘルム・テル』（桜井正隆・桜井国隆訳、岩波文庫）もある。これは、1929年第1刷から、版を重ね、1984年で25刷に上る。だが、それ以降増刷なく、学生の手に入らない。

建国伝説の真偽のほどはおくとしても、1291年に実際に盟約されたことは、現存する「同盟文書」の原本から確証される。原本には3つの溪谷の印璽が吊されたが、どういう訳か、シュヴィーツのは紛失している。建国文書ともいわれる「同盟文書」は、他の建国に関わる文書と一緒に、現在、シュヴィーツの州都にある建国文書館で一般に公開されており、いつでも自由に見ることが出来る。

この「同盟文書」によれば、「神の御名において」、溪谷ウーリ、シュヴィーツとニートヴァルデンの人々は、「暴力、労苦または不法を加える、あるいは生命と財産に関し、何らかの悪意を密かにたくらむ」者に対して、「相互に援助することを充分なる誠実をもって約束した」。さらに、溪谷間あるいは溪谷内の争いには、溪谷の「最も賢明なる者」が仲裁する義務を負った。また、溪谷内外で起こる殺人、放火、強奪などの重大な犯罪や、不法な差押さえに対しては、厳しい処罰が詳細に定められており、いかに溪谷地方の平和維持が大事であったか、が想像できる。

「リュトリの誓い」とも呼ばれる「原スイス永久同盟」は、基本的には、早くは12世紀初頭からヨーロッパ各地で頻繁に結ばれていた都市同盟とはあまり違いがない。アルプス山麓の溪谷は、当時のほとんどの都市、とくに帝国都市と同じような動きをしていた。もちろん、この永久同盟は、はじめから国家形成を意図した訳ではなく、当時の不安定な政治状況にあって、何よりも一定地域の平和を守ることを目的とした同盟に過ぎない。伝説で誇張されているような、ハーブスブルク家の「圧制」とか、不当な攻撃は、実際にはそれほど酷くはなかった。確かに、外部の者、この場合ハーブスブルク家の役人の代わりに、溪谷の指導層が「溪谷の裁判官」になりうる資格を持っている、という裁判官条項は、同盟文書でとりわけ注目に値する重要な条文であるが、これも、当時帝国都市や溪谷に与えられていた国王文書の字句とほぼ一致

しており、その確認に過ぎないものである。

とはいえ、ハーブスブルク家との対立の兆しが見え隠れしていたのも、13世紀初めからの同家の貪欲な勢いから、十分に考えられる。しかも、1273年には、ルードルフ1世が同家の初代の国王に即位したのである。そして、溪谷との公然たる戦いの導火線になったのは、13世紀に入って再燃した、同家保護下の近隣のアインジーデルン修道院とシュヴィーツとの争いからである。内陣の前方にマリア崇拝を設置し、多くの巡礼者を呼ぶ、この壮大な修道院は、放牧地境界争いで、シュヴィーツと衝突した。これ以降、4つの溪谷とハーブスブルク家の衝突は、あらゆる場面で頻繁に起こり、14、5世紀における「原スイス永久同盟」の発展は、実は同家との激しい勢力争いなしには考えられない、といってもよい。

1315年秋、シュヴィーツ北の州境、モルガルテン山で、激しい合戦となった。前年のシュヴィーツ人による修道院への夜襲を口実に、ハーブスブルク家の騎士軍は、狭い峠道沿いにシュヴィーツに向かって進軍して来た。これに対して、溪谷の歩兵軍は、地の利をフルに活かして、急斜面から奇襲攻撃に出て、矛槍で、あるいは石や木の根を崖から振り落としながら、大軍を蹴散らした。戦陣は乱れ、騎兵も馬も、また歩兵も峠道の片側の沼地にはまり、溺死するか、退却しかなかった。モルガルテンの戦いは、同家に対する勇敢な溪谷の人々の最初の輝かしい勝利で終わり、スイス人が誇りとする戦いとして後世に名を轟かす。その記念碑が、近くの湖畔の丘に建てられており、次のように刻まれている。

「モルガルテンの勇士達のために、1315年。1315年11月15日、誓約者たちは、神と祖国のために、モルガルテンにて戦った。最初の自由のための戦い。」

その戦いの直後、同年12月9日、四森林州湖畔で、丁度リュトリの草地の対岸にあたる小村ブルンネンにおいて、「原スイス永久同盟」が更新されたのである。今日、ブルンネンは、中スイス屈指の保養地として、多くの人々を引きつけているが、建国を記念したものは、何も見あたらない。

モルガルテンの戦いに華々しく勝利を取めたとはいえ、依然ハーブスブルク家との交戦状態は続き、その3年後にはじめて双方の休戦になった。そのためか、1315年に更新された同盟文書には、明らかに同家の反撃に備えた軍事防衛条項が新たに盛り込まれた。共通の同盟締結権も含めて、公然とハーブスブルク家に敵対する共同防衛策がはっきりと打ち出されたのである。今や永久同盟が政治的軍事同盟の性格を帯びた。それは、何よりも溪谷間の結束を一層強固したことを意味したのであり、ここに「原スイス永久同盟」の一枚岩がしっかりと据えられたことになる。

これ以降、周辺の都市が次々と加わり、同盟網が拡大していくが、その場合、常にこの永久同盟を核に、その輪が広がる仕方で発展していったのが、注目される。四森林州湖畔の都市ルツェルンが、まず、1332年にこの同盟と盟約した。1351年には、都市チューリヒが、ルツェルンと一緒に、この永久同盟に加わった。翌年には、溪谷グラールスと都市ツークが相次いで加盟し、1353年には都市ベルンも加わって、「原スイス永久同盟」は、「8つ溪谷と都市」からなる、いわゆる「八州同盟」に発展した。この中身は、極めて特異な関係であって、6つの異なる同盟からなる緩やかな連合体に過ぎない。しかし、これらの諸同盟の土台になっていたのが、「原スイス永久同盟」である。それは、1513年の「十三州同盟」でも変わらず、従って、1291年に公布され、1315年に更新された「同盟文書」は、古いスイス連邦が崩壊する1798年まで、実に500年余りもその効力を持ち続けたことになる。

このように、「原スイス永久同盟」を起源として、1353年の「八州同盟」を経て、1513年の「十三州同盟」に発展した。中世末期、一方で、積極的な領域政策に乗り出し、国土防衛では

かなり成功しながらも、強引な対外戦争で敗北したり、他方で、勇敢な傭兵の活躍がスイスに利益をもたらすとともに、同国人同士で血を流す、という悲劇をしばしば呼んだ。こうした悲喜劇から、自ずと中立への道を探る、というのが、この時代のスイスであったが、その中身は、こうした特異な同盟関係であったから、驚く。

また、世界史教科書に出てくるように、すでに1499年、スイスは神聖ローマ帝国から事実上独立するが、宗教改革から宗教戦争の間、何度も宗派对立から苦い国家危機を経験する。そして、17世紀のスイスは、三十年戦争の戦乱を巧みに切り抜け、その法的な独立と中立主義を強国から取り付けるのに成功する。こうした中世末から近世のスイスの中身も、全部で13の都市と溪谷ないし農村領域からなる10同盟関係に過ぎなかった。このように、「十三州同盟」からなるスイスも、極めて特異な国家形態ではあったが、1848年近代国家に生まれ代わるまでに、スイス連邦の発展の礎をしっかりと築いていたのである。

4. おわりに

「スイス学のススメ」として、この他にも取り上げるべき事項は、数多くある。私の研究対象から、明らかに古い時代に偏り過ぎているが、教養科目であれ、専門科目であれ、本来の大学の授業はそれぞれの地道な研究に裏打ちされていなければならない、と基本的に考えているので、こうした偏りは許されてしかるべきではなかろうか。

大切なことは、学生が興味を抱くよう、教授法とか、内容に工夫を凝らすことである。教授法については、すでに言及した。内容については、何よりもマンネリに陥らないために、毎年吟味し、新しい知見を盛り込むよう、日頃から努めなければならない。それには、ヨーロッパ古代中世史の最新の研究動向に敏感でなければならないし、また同時に、スイス本国の概説書を可能な限り取り込む必要がある。それだけに、専門科目ではあるが、「ヨーロッパ史文献講読」で、スイス史の概説書を読んでいるのは、とても有益だ。フランス語か、ドイツ語の『スイス史』をこれまでに何種類か読んで来ているが、ここから、多くの知られざる情報が確実に「ヨーロッパ史」の授業に反映されている。

さらに学生に関心を引き起こさせるのに、最新のスイス事情から新たな問題を引き出すのも望ましい。たとえば、「アルペン・イニシアティブ」は、興味深い問題だ。1994年、スイス環境保護団体の発議で、アルプス越えのEUの大型トラック便をすべて、10年以内に鉄道便に切り替えるよう求めた国民投票である。結果は、ほんの僅かの差で支持された。ここから、改めてスイスとEUとの関係は微妙になり、スイスの行方が読めなくなった。一方で、ユーロ・クレジット決済がスイスで相当普及しているのと、西スイスには、EU旗を翻す光景にしばしば出くわすというのに、EU加盟問題はそう簡単ではなさそうだ。

加盟といえば、スイス最大の関心事は、スイスの国連加盟である。これまでのように、永世中立にしがみつくなか、あるいは、冷戦崩壊後の世界の中で、国連にスイスの新たな役割を見出すか、問われる。これまで何度も否決されて来た、この国民投票が、この3月3日に実際に行われ、本稿を書き終えようとしている、まさに丁度今、タイムリーなことに、その結果が判明した。それは、僅少差ではあるが、賛成多数で、スイスの国連加盟が承認された。長い間、伝統的に堅持してきた中立政策を転換する歴史的な選択である。この結果、今年9月には、190番目の国連加盟国となる。まさに歴史的な出来事である。これから、国際におけるスイスの動向が目を見えなくなる。

こうしたアップ・ツー・デートな問題から、学生が何らかの興味を抱き、スイスへの関心を一層引きつけるきっかけになるのではないだろうか。

参考文献

- U. イム・ホーフ, 森田安一監訳『スイスの歴史』(刀水歴史全書43) 刀水書房, 1997年。
森田安一編『スイス・ベネルクス史』(新編世界各国史14) 山川出版社, 1998年。
同 『物語スイスの歴史』(中公新書 1546) 中央公論新社, 2000年。
カール・ドガ『スイスの四つの国語』プロ・ヘルヴェティア文化財団。
J.-J. ブッケ, 斎藤 泰他訳「スイス古代・中世の歴史」『西洋史』第9号, 1998年。
斎藤 泰「帝国国制における原スイス永久同盟」森田安一編『スイスの歴史と文化』刀水書房, 1999年。
同 「都市・農村関係史としてのスイス連邦」『西洋史』第11号, 2000年。
同 『スイス連邦の成立と発展に関する国制史的研究』平成9年度～平成11年度科学研究費補助金〔基盤研究(C)(2)〕研究成果報告書, 2000年。
D. Fahrni, Schweizer Geschichte. Ein historischer Abriß von den Anfängen bis zur Gegenwart. Zürich 1982.
E. Fischer, Histoire de Suisse. Lausanne 1946.
W. Meyer/H. D. Finck, Die Schweiz in der Geschichte, 700-1700. Bd. 1, Zürich 1995.
F. Schaffer, Abriß der Schweizer Geschichte. Frauenfeld u. Stuttgart 1979.
K. Schib, Die Geschichte der Schweiz. Thayngen-Schaffhausen 1980.
(2002年3月3日, スイス国民投票による国連加盟承認の日に, 脱稿)